

パンデミックの社会言語学

[ドキュメント]

孤独感、
助けを差し伸べる手、
〈真実〉

フロリアン・クルマス

Florian COULMAS

[訳]

柳田亮吾

やなぎだ・りょうご

はじめに¹⁾

現時点で、私たちは一日また一日と生きている。これは私たちの大半にとって新たな経験だ。今日の最新の報告が、明日には歴史的な回顧録となってしまう。人々は新型コロナウイルス感染症によってもたらされた、不確かさと移ろいやすさに対処する様々な方略を築きあげてきた。

まさに地球規模の出来事であったため、私は地球上の人々がこれについてどのように考えているかを尋ねてみようと思ひ立ち、2020年5月と6月に小規模な調査を実施した。以下にまとめた調査結果は、新型コロナウイルス感染症大流行の初期のスナップショットであり、記録されている私たちの考えや感覚もその当時のままのものである。今となつては一つの歴史的な記録だが、その日本語訳を目にすることができるのは大きな喜びである。この大流行のため、いくつもの約束がすべて取りやめとなり、日本に行くことが叶わなくなつてしまったことを思うと、その喜びはひとしおである。再び気兼ねせずに旅行できるようになったら、日本でこのエッセーを友人や同僚に見せたいと思っている。

背景：「バイラル」なウイルス

感染爆発の第一波が世界中に押し寄せたとき、その報道が数週間にわたってニュースの一面を埋め尽くしたとき、世界中の人々が身の安全のために家にとどまるように要請されたとき、一群の飛行機が地上に降り立ち、安全な停泊港を失ったクルーズ船が取り残されたとき、繁華街がさびれて街に静寂が訪れ、空が青さを取り戻したとき、児童虐待と家庭内暴力が未曾有の規模でエスカレートしたとき、私の同僚全員がテレワークを許され、もしくは強いられる一方で他の人々が職を失ったとき、そして人工ウイルスがアメリカの核兵器と相まって人類の文明社会に終焉をもたらす1980年代の深作欣二監督の映画『復活の日』²⁾を見たとき、私は人々が「バイラル (viral)」〔訳者注：インターネット等を通じて素早く広まるの意〕についてどのように考えているのか、尋ねてみようと思った。

若い世代の人々は、世論や思想統制を牛耳る今日の支配者が彼／彼女らに言うて欲しいことに従う傾向がある。すなわち、自撮り、ビデオクリップ、ミーム、広告など、「バイラル」は素晴らしいことなのだ。必要な条件がそろえば、インフルエンサーになろう、とすら思っている。一方、上の世代の人々は、「バイラル」と聞いても必ずしもよいものを連想するわけではない。このラテン語の用語が、かつては「疫病をもたらす (morbiferum)」、「病原体 (pathogenum)」、「ウイルスに關係する」という意味でしかなかったことを思い起こすからだ。彼／彼女らにとっては、うわさやニュース、ゴシップが急速に広まったとき、それらは「野火のように広がった」のであり、つまり、望ましいものではない。

しかし、完全な悪や完全な善というものはこの世にほとんど存在しない。登場した当初「自由のためのテクノロジー」³⁾として称賛されたツイッターやフェイスブックを、今なお基本的に良いものとする人すらいるが、彼／彼女らは、世界中でこれまでにない最も大きな、最も不快なゴミ溜めが、いわゆるワールド・ワイド・ウェブであることには目をつぶろうとしている。というのも、自分の目的のためにそれらを悪用することができるからだ。

とはいえ、その判断を一般化するのは早計であろう。かつて自然災害（2011年の東日本大震災）から生き延びることができたとき、（通信ネットワークが